

資料室だより 149

中瀬古和(1908~1973) 人と作品集について

皆さんは日本の教会音楽に貢献した人というところのような名前を思い浮かべるでしょうか？ 教会内部でしか知られていない、あるいは教会を一步出れば世間では通用しないような音楽家ではなく世界に通用する自立した音楽家による教会音楽への貢献ということを考えてみてください。

ここにご紹介したいのは日本がもっと誇ってもよい女性の作曲家、中瀬古和氏の教会音楽における貢献です。今年で没後 50 年になります。残念ながらその存在はあまり知られておりません。讃美歌集の作者に名前を連ねていないためでしょうか、キリスト教人名辞典にも名前がありません。しかし目立つこと、世間的に著名であることだけが優れていることの証ではなく深く足元を掘り下げて信仰を音にすることが教会音楽の本質です。自己の榮譽のためではなく神への賛美のための音楽ですから。

この秋、没後 50 年を記念してその業績を次の世代に伝えようとする心ある熱意の方々によってレクチャーコンサート「捧げまつる感謝の歌—神と共に生きた作曲家 中瀬古和一」が開かれました。その折のパンフレットによりますと、1926 年、単身で渡米、ワシントン大学音楽学部ピアノを専攻しています。その後ヒンデミットの作品に触れたことをきっかけにベルリンでヒンデミットに作曲を師事します。若い日本の女性が自分の感性によってヒンデミットを師と仰ぐのです。帰国して同志社女子専門学校でピアノ、作曲、和声学の教鞭をとり 1937 年には日本人として初めてチェンバロを演奏しています。ヒンデミットの「マリアの生涯」を本邦初演し毎日音楽特別賞を受賞、毎日作曲コンクールにも受賞、さらにイエール大学で作曲の研鑽を積むという戦前の日本人女性として広い視野を持つ活動をされます。さらに翻訳活動もされていますので演奏実践と創作と学究とをこなされた総合的な音楽家といえるでしょう。そのような音楽家をミュージシャン・コンプレ（完全な音楽家）と呼びます。20 世紀以降、技術が分業され、そのような音楽家は少なくなっておりますが中瀬古氏はまさにその称号がふさわしいのではないのでしょうか。そのような方が教会に生き、信仰に基づく創作活動をなさっていたのです。64 歳で帰天という短いご生涯でしたが彼女は作曲家として日本洋楽史、またキリスト教音楽史のなかにもっと正しく位置付けられるべきと思います。

このたびレクチャーコンサート実行委員会代表者様のご厚意で同志社女子大学から発行された作品集を資料室にいただきました。この聖グレゴリオの家も日本人による日本語の教会音楽の収集を一つの使命としております。当館の蔵書の中に中瀬古氏の日本語による宗教音楽作品が加えられることはまことに嬉しいことです。作品集には詩編、知恵の書、イザヤ書、ルカ福音書などをテキストに用いた声楽曲があります。

閲覧を希望されるかたは資料室までお声をおかけください。

(杉本ゆり 記)